蘇芳集

夏至の窓

青山　丈

六月の出来たばかりの水溜り
暗くなるまで開けてある夏至の窓
ブランコと砂場に雨の降つてゐる
両方の目で見て水中花を足しぬ
梅雨の蝶時間が経つて飛んでゐる
潜りたる茅の輪の先も雨が降る
紫陽花もいいが精養軒もいい

朱の橋

清水裕子

波頭吾れへ押し寄す啄木忌
うららかやビルの百窓空映し
佃煮を買ふ船宿の遅日かな
朱の橋の足音さまざま夏至の昼
一雨後の空まさをなる祭笛
不意に落つ椿の一花頭上より
石に身を置く足下を蟻働く

五月果つ

下平直子

百枚の植田きらきら夜の明くる
手庇をはみ出す朝日夏立ちぬ
洗顔に肘まで濡らし夏に入る
空腹の心地よきまで万緑裡
老鶯のこゑ山ひとつ越えゆけり
薫風や流るる楽に歩を乗せて
漣に夕日の溶けて五月果つ

薔　薇

冨田正吉

どこからでもゆける金魚の飼ふところ
でで虫を腹の空くまで見てゐたり
ぼうたんへ夜はしづかに来つつあり
薫風や会ひたき人は逝き給ふ
呼鈴を押せと教へる薔薇の門
旅人となり薔薇園の中にをり
命ある日々が晩年薔薇満開

梅雨さなか

野路斉子

拭き上げて梅雨の窓とはこんなもの
カレー粉の缶からし粉の缶梅雨さなか
蝸牛のお産が近し眼鏡買ふ
病葉や電話の声だけは元気
算数は苦手さくらんぼう等の
坂と云ふ町の減り張り狗尾草
月親し花火終はればすぐに出て

夏至の日

別府優

青山椒けふのほとぼり持ち帰る
老人に勇みごころや花樗
腕なきマネキン起こす立夏かな
母の日の池の踏石渡りをり
薔薇園の午後の見頃となりにけり
夏至の日の坂ぐいぐいと登りきる
手拍子で歩く講座や夕茅花

無　音

前田陶代子

野の花のむらさきがちに更衣
ひなげしの揺れの中なる思ひごと
森五月鳥影あをく地を翔てり
合流の水のかがよふ聖五月
花は葉に茶房の卓の真つ四角
払ひてもまとはるまくなぎの無音
繕ひの糸のもつるる夕薄暑

風光る

松原ふみ子

ひと想ふとは逃水を追ふごとく
知る筈の道に迷ひて春の暮
風光るトップランナー位置に着き
待ち合はす涼しき風の通り道
見え隠れして先達の夏帽子
風五月声にして読む由緒書
一陣の風芍薬を崩し得ず

はつなつ

峰岸よし子

樹と語り水とむつみて聖五月
金雀枝や木椅子天主に真向へる
矢車の風得て色を失へり
はつなつのポットに浮かぶミントの葉
たれかれに逢はむと衣更へにけり
前略と書きしばらくを窓若葉
子の家を辞すに潮時夕郭公

明日は雨

宮尾直美

玉葱も豌豆も採り明日は雨
ひとしきり郭公鳴けり舟着場
新緑を突つ切つて来る一輛車
よく笑ふをんなの声や菖蒲園
父の忌の雨にかをりぬ花茨
麦こがし涙もろきは母似なる
甥が着て父とぞ思ふ白絣

走り梅雨

八木下末黒

十薬や蛇口しつかり締直す
十薬の下の暗がり蛇苺
夕方の燈明ともす走り梅雨
走り梅雨早めに雨戸閉めに立つ
立葵かたへにコイン精米機
六月のはじめの風を松林
蓮青葉かさなりあつて何々ぞ

桜桃忌

吉田幸敏

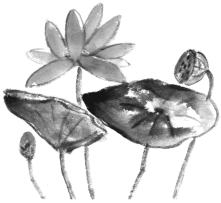
トマソンの無用階段梅雨に入る
在五忌のホームの下を梅雨の川
ほまち田に人の影ある芒種かな
桜桃忌赤きネオンのＢＡＲとのみ
鴨涼し己の声の中に浮き
白百合が開いたでしようそちらでも（中谷信子さん一周忌）
大滝と詠めば水音のことさらに

母の日

小川美知子

机辺にて四月をゆかすミルクティー
ザリガニを汲み上げ生物調査隊
小さき蜂ハコネウツギを出るところ
鵜の頸のぐるりと回る薄暑光
葉桜の奥の方から日が暮れて
母の日や母であること思ひ出す
父と娘の会話が通る若葉風

夏めくと

木内憲子

人のゆく方に倣ひて青き踏む
かぎろへるものに触れむと蹋みけり
ゆく春の夜が片付いてゆく思ひ
夜遊びの空が広くて五月くる
花うつぎ鴉ばかりが啼いてゐる
花束は羽の軽さや聖五月
夏めくと橋の辺りで人と会ふ